

## 私の教育実践の記録 ～アクティブ・ラーニングに関連して～

滝澤 民夫

### はじめに

この10年間、筆者が3大学で教職科目を担当するなかで心がけてきたのは、不十分ながら授業ごとに受講生の感想文を集めて分析し、できる範囲でコメントをつけて全員分を印刷して返却したことである。それがアクティブ・ラーニングだとの自覚はなかったが、捉えようによっては、受講生と教員との対話・受講生相互の感想・発想・主張の共有という点ではアクティブ・ラーニング的手法だったといえよう。受講生の期末レポートには筆者の主観ではあるが、表題をつけて、簡単なコメントを加えて返却し、興味深いレポートの一部を紹介して資料配布し、まとめの講義としてきた。たとえば、次のような事例である。

### ◆2016年度 駿河台大学 教職論・教師論(前期、2単位) [2016.7.20. 第14回資料]

(前略) 受講登録111名中、102名が提出しています。残念ながら6名が出てこなくなりましたので、残りは3名です。それぞれのレポートが一生懸命書かれていました。評価としては、○が80名(78%)、△が22名(22%)でした。成績評価は春学期を通しての出席、感想文、提出物、期末レポートを総合して判断します。102名のレポートに題をつけてみましたので、紹介しておきます。

生徒とともに壁をのりこえる、教職観が変わった。また変わるだろう、自分を見つめなおす、やりたいことをやり、思っていることを伝える、教職論の授業で学んだ5つのこと、他人の成長に喜びが感じられるように、教員へのイメージが変わったことと心の成長、教師という職業について考えて、寄り添い、突き放しもする、誠の教えを貫きたい、先生になるのは大変だが、頑張りたい、今できる事を一生懸命やりたい、生徒のことを思いやり、よく観察して育む、生徒の将来を考えて生徒に接したい、生徒が話しかけやすい教師になりたい、一人でも多くの生徒をよりよい道へ、目的に向けて行動に移したい、教育制度と教員と部活動、生徒を思いやる心とコミュニケーションの大切さ、五つのことを考えた私、自分はどんな教師になりたいのかを考えた、信頼関係を求めて、夢を捨てずに頑張りたい、理想に向かって、理解と納得の先に、部活動について、覚悟をもって取り組みたい、生徒たちに決めさせたい、授業の中心は生徒、教職に憧れをもつようになった、学んだ5つのこととチャレンジ精神、いじめに向き合い、子どもに向き合う、未来への道を切り開く仕事、つらさと楽しさと、生徒にしっかり伝えたい、死なない程度に頑張る、現実と向き合う、できる事をやり理想に近づけるように努力したい、部活動と教員の在りかた、立派な教師ではなく良い先生に、教師の仕事と「挨拶・礼儀・笑顔」、先生は何のために仕事をするのか、人間力を育てたい、教員として最も大切なことは、教員にむいているのかどうか、生徒とともに成長する、学んだことを生かしていきたい! いろいろな人と出会い支え合いたい、生徒一人ひとりに寄り添う、諦めかけた私の背中を押してくれたもの、若者が自由に夢を描ける未来は、多面的な教員でありたい、教員の仕事とは? 教員にとっての授業とは、甘かった自分だが、漠然とはしているが、目標が見つかった! 自

分の言葉で救われる子を増やしたい、授業とは、学校とは、教師とは？ 人として生徒と正面からぶつかっていくこと、平等で生徒や保護者から信頼されるために、教師である前に人間として、3つのことを考えた授業、教員の心がまえと自負：子どもの成長、「生徒が主役」の学級づくり、「一回性」の人生、理想に向けて近づけるように、生徒の気持ちを考えてあげられる先生、部活動と生きる力、いろいろな刺激を受けたが、まず大学でしっかり勉強したい、教員の労働時間と休養日、人間性を教えたい、個性を認め学びを深める自分を作りたい、生徒を主体に、学びつづけたい(反面教師を念頭に置きながら)、<sup>ちゅうじょ</sup>忠恕の心、<sup>ひと</sup>他人との落差を見つめるなかで、教員への道筋とは、生徒と一緒に動く教員、印象に残った5つのこと、信頼関係を大切にしたい、教師という職業への興味、生徒とのコミュニケーションを通じて互いに成長してゆきたい、目標とされ、尊敬される先生になりたい、常識と心のあり方、基盤となる価値観を創る、人に「伝える」こと、生徒に本気でぶつかりたい、価値観を分かり合おうとすること、努力とみんなに応援されること、人間の個性と向き合うこと、学び合いと初心の大切さ、余裕を持ち広い視野をもちたい、理想に向かって努力しつづけたい、体罰は必要ではない、理想の教師を旨ざしたい、理想の教師と人間形成、将来を変えるという夢、人として成長したい、大人と生徒、両方の視点、「学ぶ力」を引き出す、教員のメッセージ性、批判できることとは

こうしてみなさん方のレポートに表題をつけてみると、さまざまな観点から「教職とは何か」「教員とは何か」、あるいは人間とは、人の生き方とは、などを考えたり提起していて、教えられることも多くありました。教員を目指す学生としての基礎である人間観、価値観、教育観、社会認識(戦争と平和問題を含む)、歴史認識、教員観、教職観、コミュニケーション論、伝達論、生徒との距離、専門知識の大切さ、授業作りの大変さ、生徒との信頼関係の重要性、あるいは教職への懐疑、などが書かれていました。みなさん自身の「自己を振り返る」一画期になったのではないのでしょうか。

読みながら、総合的に教育、生徒、保護者、授業、仕事、労働、余暇、部活動、人生、価値観などをとらえる視点の基礎が形成されつつあると思いました。授業中の班活動への理解と仲間意識の形成ができたこともよかったと思います。

これまで受けてきた学校教育や授業や部活動の体験、影響のあった先生などの振り返りから立論しているレポートが多かったのですが、いくつかの文献を引用するにしても、体験に裏付けられた自身の内面からの文章に置き換えて、平易に考えたことを表現することが、子どもや少年、青年との会話が基本となる学校教育では大切です。

さて、教員は児童・生徒・学生などの成績評価もします。今回のレポートの評価は、私の授業を受けたみなさんへの評価ですから、この授業を踏まえて立論していないと、過去の学習体験や引用文献だけでは抽象論・一般論になりがちです。また、自論を展開する場合にも、自分の場合のみを論じているだけでなく、仲間の取り組みとの比較も必要です。したがって、先生が変われば違う評価もつきますから、評価自体は相対的です。この授業にどう参加し、仲間と話し合い、レポート作成で何を考え、どう立論し、何を試みたのか。苦勞して何が分かり、どんな課題が見えてきたか、そんなことを確認してみましょう。

これからも元気に、自分の良いところを発揮してってください。お疲れさまでした。

最後に、問題提起をしていたり、心に残ったレポートのうちから、18人のレポート(全部もしくは一部)を紹介します。(後略)

◆2016年度 大東文化大学 教科教育法 地理歴史(通年、4単位)

[2017.1.17. 第30回資料]

(前略)

2. 模擬授業のまとめ

模擬授業は以下の内容で、8人が25分で行いました。

各回の講評をまとめると、次のようになります。

■N先生の世界史A「大航海時代」は、落ち着いて授業を進めることができました。生徒もよく集中して前向きに取り組んでいました。教科書を読ませたり、板書に記入させたり、生徒が動く場面を作ろうと努力していました。もう少し主体的に生徒が参加する場面をどう作ってゆくか、授業構成の検討が課題となりました。

■S先生の世界史B「西ヨーロッパ中世世界の形成」は、調べてきたことを一生懸命説明していました。よく努力していて、熱意が伝わってきました。その点は、授業内容としては面白く聞けたのですが、授業の主人公は誰かという点では、生徒の方をあまり見ていなかったように思います。生徒が生き生きと参加する授業づくりが課題となりました。指導案に参考文献を加えて再提出してください。

■T先生の日本史B「国風文化」は、調べてきたことをみんな伝えようと、すごいスピードで授業を展開しました。よく予習をして準備をしてきたと思います。生徒も必死に参加していました。課題としては、すべてを限られた時間で押さえるのではなく、いくつかの焦点を当てていねいに理解させ、そこから国風文化全体を考えてゆく視点を育てることではないかと思えます。教案の絞り込みを考えてみましょう。

■M先生の世界史A「資本主義の発達と社会主義運動の発生」は、産業革命期のロンドンなどの市民生活の写真を持ってきて、具体的、視覚的に19世紀初頭のイギリス社会の変化について分かりやすく説明しようと努力していました。不慣れなせいか、ゆっくり生徒の方を見ながら授業を進めるというよりは、メモや教科書を見ての展開となりました。授業に慣れ、授業構成のさらなる検討が課題となりました。

■K先生の地理B「世界の地形」は、明るく穏やかに授業を進め、生徒も楽しそうに参加していました。教材研究で調べたことを板書の地図や図を用いながら生徒に説明していました。今後、視覚的に生徒に理解を促すために、パワーポイントの活用やカラー写真の用意など、いろいろ工夫をしてみる可能性があると思います。字もとてもきれいでした。授業案のさらなる改良が課題となりました。

■G先生の世界史B「古代のエジプト」は、導入から生徒に多く発言させながら、いい雰囲気ですべてを進めました。調べてきたことを教科書に沿って、そつなく教えていました。エジプトの気候や王と王国の存在について説明をしていましたが、その王国を支えていたのは誰だったのでしょうか。その辺のエジプト文明・エジプト王国の構造まで掘り下げて文明論をまとめると、より深味が出てきたと思います。さらなる教材研究が課題となりました。指導案に参考文献を加えて再提出してください。

■A先生の世界史B「ナポレオン戦争一全盛期」は、一生懸命勉強してきた内容を、わかりやすくいねいに、写真を配ったり、略地図を入れながら説明しており、生徒もよく聞いていました。落ち着いて淡々と解説をしていて、良い雰囲気でした。グループワークも取り入れていましたが、さらに生徒が主体的に参加できるような工夫を続けることが課題となりました。指

導案に参考文献を加えて再提出してください。

■ Y先生の地理B「アメリカ合衆国の農業の特色」は、プリント資料への書き込み作業を取り入れながら授業を展開しました。ゆっくりした口調でいねいに説明と板書をしていました。分かりやすい内容で、生徒もよく参加していたと思います。広大な国土と気候と農民の姿をよりリアルに生徒に伝え、農業問題の現状と課題を考えさせるために、TPPなども含めて、さらにどのように工夫を深めるのかが課題となりました。

全体として、みなさんよく努力したと思います。それぞれの仲間の模擬授業を受けてみて何を感じましたか？ 授業とは教員それぞれの語りであり、個性そのものですね。同時に、先生が1人で行うものではなく、教室という学びの場で、生徒同士、生徒と先生とが、ともに作り上げてゆく場であり、機会であり、きっかけでもあるのです。

授業の内容論と方法論をさらに深めて、教材研究を続け、地道に指導案を練り直す努力を続けることが大切なのです。8人への講評には、どのような指摘と助言が共通の課題としてあるのでしょうか。それらを踏まえて、3年生は教育実習に向けて準備を進めてください。4年生は今後の勉強の構想を立ててみてください。

### 3. 期末レポート「私の地歴科教育論」のまとめ

初回の講義でも話しましたが、学校での教育というのは、「生徒がいて、親がいて、先生がいる」わけです。教育とはあくまでも生徒が主人公だということです。

井上ひさし作『父と暮らせば』の公演、福島第一原子力発電所事故その後（関連して東京電力の社員全員による福島の事故現場での除染作業について記事も読みました）、「足尾鉍毒事件」、「高度経済成長と水俣病」などの授業でも触れましたが、世のなかを生きてゆくときに、自分の信念を持って生きることは、場合によっては周囲や体制とぶつかったり、阻害されてつらい目にあったり、いじめに遭ったり、無視されたり、「正義」や「理念」を主張しようとすると妨害されたり、排除されることがあるかもしれません。そんなときに、人はすぐには「己に厳しく、他人にやさしい人」にはなれないのですが、なりたいという思いを捨てないようにすることで、自分の誇りが維持され、そこから展望が見えてくるのだと思うのです。

1年間の授業でしたが、それぞれのみなさんは、やらなければならない多くの取り組みの優先順位に、この授業をどう位置付けていたのでしょうか。できる範囲で努力ができたのでしょうか。

期日までに提出された5人の期末レポートを読んで見ると、1年間の学習を振り返って、自分なりの地歴科教育方法を考えています。次のような表題をつけてみました。

**生徒の気持ちを理解する先生をめざしたい、一人一人に歩み寄って根気強く接する教員に、眠くならず集中できる授業をめざしたい、学び続ける意思を持たせたい、「知識は財産」の自覚**

自論をまとめて提示しようという熱意も伝わってきました。未完成な報告もありましたが、それぞれ、多方面からさまざまな感想と考察が記されていました。また、小中高で受けてきた「暗記」社会科の授業に影響されてきたこと、それをどう乗り越えようとするかも記されていました。

そこでは、結果として、「教育とは何か」「授業とは何か」「歴史とは何か」「地理とは何か」「歴史教育・地理教育の役割」などが問われるとともに、教員を目指す学生としての基礎である人間観、教育観、授業観、生徒論、社会観、歴史観、価値観、認識論などが綴られています。

た。これからも自分の目標に向かいたいと、生き方を真摯に問いかけている文章には感銘を受けました。

シラバスに書いた目標が達成されたかどうかは、今後の皆さんの取り組み次第です。3年生にとっては、来年の教育実習は5カ月後、教員採用試験は6カ月後ですので、健康に気をつけて万全のコンディションで臨んでください。4年生は今後の勉強の構想を立てて、広く深い学びに向けて気持ちを引き締めてください。1年間、おつかれさまでした。

以下、レポートの一部分を紹介します。(後略)

◆2016年度 早稲田大学 地歴科教育法2G(前期、2単位) [2016.7.23. 第15回資料]

(前略) 今回のみなさんの各レポートでは、①暗記社会科の克服、②生徒が主体的に参加をする授業方法論の模索、③社会認識・歴史認識の伝え方、という3つの課題が通底していました。体験や学習をもとにした生徒論、学校論、教員論、授業論、教科論、教材論、現代社会論、現代世界論、地理実践論、歴史論認識論、哲学論などが提起されていました。(中略)

21人のレポートに題をつけてみました。

アクティブ・ラーニングの意義、教育や授業に対する意識の変化、魅力的な授業を目指す、授業の工夫と展開、生徒参加型の授業、真実と事実の見極め、地歴科を学ぶ意義、教員の問題意識と生徒の探求心、一斉授業の伝統の意義、人として信頼されることから、今をみつめて見えてくるもの、地域史と通史との架橋、生徒の「なぜ」を重視したい、模擬授業分析、人間像を考えるとところからの出発、社会科教育の理念、自分で考える学び、育てることの意味、中立的立場で物事を処理する、生徒の学習意欲をサポートするとは、生徒に「自信」をつけさせる方途とは

このうち、何人かの報告の一部を紹介してみます。(略)

最後に、2011年の「社会科教育法2I」から1例、報告の一部を紹介します。

●強く印象に残ったのは、知識自体が、興味を継続的に動員し続けることができる側面でした…受験というアメと鞭を用いたり、私のように実利という人参を用いたりせずとも、知識自身が人をして継続的に知識の探究に向かわせることを、実体験として経験できたのは貴重な収穫でした…社会科の授業は、国語や理科といった他の[教科]科目以上に、複数のフレームワークの集合体であると言えます。歴史、地理、経済、政治、法律、行政、倫理、哲学など非常に幅広いフレームワークの下に、下位分類として様々な意見やアプローチの違いがあり、無数の解釈余地が残される科目であると言えます。このように、多様なアプローチを包摂する社会科では、一つのフレームワークを身につける暇もないまま、他のフレームワークでの分析が展開され、生徒や初学者にとっては体系的な理解枠組みを構築しにくい側面があるように思えます。そのため、教科書のページ毎に異なるアプローチが採用されているにもかかわらず、これらを弁別する余裕もなく、ひたすらに教科書を暗記するという苦痛に満ちた科目になっている場合もあるようです。しかし、それを逆に転じて、知識不足ではいけません、生徒と教師がともに探究し続ける授業が社会科において出来るのではないかと考えました。(Jさん)[2011社会科教育法2I]

◆2016年度 早稲田大学 社会科教育法2I(前期、2単位) [2016.7.23. 第15回資料]

(前略) 25人の「私の社会科教育論」を読みました。内容的には、力作ぞろい、教えてきて、

逆に教わることが多くありました。「社会科(地歴科)教育とは何か」を通して、教員を目指す学生としての基礎である教育観、歴史認識、社会認識、価値観、情勢分析、などが書かれていました。みなさん自身の「自分づくり」の一面期になったのではないのでしょうか。

味わいのあるレポートは、「私の」がきちんと書かれていた報告でした。多くの本や論文を引用しても、自身の内面からでたことばに置き換えて、わかりやすく思いを伝えることが、子どもや青年との会話でなり立つ教育ではとても大切だからです。したがって、引用文多い構成を否定するわけではなく、安易な引用は避けたいという趣旨です。同時に、本講義や仲間の模擬授業と論議を通して考えたことに触れながら自論を展開する構成には奥行と説得力がありました。

今期のみなさんの「社会科(地歴科)教育論」(順不同)を整理すると以下の通りです。

準備の大切さ、 社会科の面白さを感じ、伝えたい、 教員も成長する授業のあり方、 社会科は社会科だけにあらず、 複線的かつ重層的な授業構造、 子どもが自ら学ぼうとし、考える力をつけられる社会科、 学ぶ意欲を引き出す授業とは、 良い授業とは何か？

教員と生徒の関係性の重視、 思考プロセスを重視する社会科、 あるべき社会科像とは？  
考える科目への多難さ、 総合科目としての社会科、 他分野を横断する社会科を、 笑顔がある授業、 生徒にとっての授業とは、「なぜ？」を追求したい、 生徒が「心から」参加できる授業、 生徒に何を伝えるのか、 思考過程を重視する社会科、 生徒の成長に貢献するには、 子どもたちの驚きが原動力、 社会科の魅力を伝えたい、 迷っている私だが、 専門的かつ総合的社会科

全体的には、あるべき社会科像、教育像、教員像、授業像などを模索している熱意が伝わってきて、読んでいて教えられることがたくさんありました。今後のさらなる考察の深化と実践を楽しみにしています。

また、教職を目指すにあたっての不安や悩みもあるとの文もありました。そこで、2011年5月2日に大阪大学豊中キャンパスの総合学術博物館で、大阪大学創立80周年記念展「阪大生・手塚治虫一医師か？マンガ家か？」を見学してきたのですが(展示目録はなかったものの、原画も多くあり、興味深い内容でした)、そのときの印象記を紹介します。

印象に残ったのは、1つは、手塚が1952年に「ジャングル大帝」を描きながら医師国家試験に合格して、翌年医師免許を取得し、1961年には奈良県立医科大で「異型精子細胞における摸構造の電子顕微鏡的研究(タニシの精虫の研究)」で医学博士になったことです。2つは、1979年11月2日の医学部学園祭での講演で、「僕が(ブラックジャック)で描きたかったのは医学上の知識や手術の方法なんかじゃなくて、医者というのは何も人間の命を引き伸ばすのが仕事じゃない。その患者に、あと残された時間をどう有効に使ってもらってことが大事なんじゃないか。それが医者の仕事というもんじゃないかということを描きたかったんです。(中略)僕自身はさっきも言ったように、結局人間っていうのは限られた命の中で何ができるか、どれだけのことができるかってことが大切じゃないかと思っているわけですが、将来のことや人間自身のことを考えてみたときに、いったい医者という仕事はどういう意味を持っているのかということ、どうか皆さんが本当の医者になる前にもう一度考えてみていただきたいと思います」と語ったという展示解説でした。

◆2016年度 早稲田大学 地歴科教育法2 A(後期、2単位) [2017.1.28. 第15回資料]

(前略) 17人のレポートに題をつけてみました。

時代を読む力と歴史教育、深い学び、現代と未来につながる学び、協働的な学びのための焦点化、「生」につながる授業とは? 考えつづけるということ資料や思索のフィードバックによる学び合い、人間の歴史を多くの人に伝え繋げる歴史教育、知識と知識がリンクする学び、「対話」重視の授業とその課題、生徒一人一人が中心となる授業、常識につながる歴史認識とは、考える力を育てる授業、問いかける授業、対話する授業、物事のつながりを見つめる授業、生徒との対話の重視、発問と史料を活用した生徒が想像力をめぐらす授業、現代社会と結びついた地歴科教育論、生徒が考える時間を大切に、生徒との対話に向けて学びつづけたい (後略)

これらの受講生の教育論には、最近の「アクティブ・ラーニング」の流行の片鱗がのぞいてもいるのだが、「深い学び、現代と未来につながる学び、協働的な学びのための焦点化」、「資料や思索のフィードバックによる学び合い」、「考える力を育てる授業、問いかける授業、対話する授業」、「発問と史料を活用した生徒が想像力をめぐらす授業」、「生徒が考える時間を大切に」、「生徒との対話」、といった、結果として「アクティブ・ラーニング」に言及している内容のものもあった。

また、授業での毎回の感想文とコメントの返却に関して、次のようなやり取りをした。

◆感想の共有

・感想の共有は授業の「学び」が深くなる…感想をしっかりと書くことで「何を学んだか」「何が気になったか」「何がわからなかったのか」が整理される。これは深い学びであり、主体的なものだ…授業をする立場になった時は、こういう深い学びを経験させたい…。

→学んだことを振り返り、それを整理してまとめ表現する。感想とは学びのステップです。それを共有して論議したり学び合うことも大切なアクティブ・ラーニングだと思います。同時に、アクティブ・ラーニングはあくまでも授業の方法論の1つです。授業で最も重要なのは内容論で、両者が相互に関係し合いながら一体化するとよいのです。その場合の要<sup>かなめ</sup>はもちろん児童・生徒＝学ぶ側が主体であるということです。

(早大 地歴科教育法2 A 2016.10.29. 第5回資料)

◆身近な題材の教材化

・身近な題材を用いて授業を行う大切さが分かった…エビという日常よく目にする食材から、その生産地、生産を行うまでの歴史的背景まで掘り下げて考えられる…新鮮な気づきがあった。学んだ内容を日常生活とリンクして考えられるようになるのが本当の意味での学びだ…驚きや共感を共に知れば、もっと知りたくなり、愛着も湧いてくる。愛着があれば大切にしよう、より良くしようという思い[想い]も湧く。また、自分なりの観点をもって分析しなければならぬ資料を用いる大切さも知った。授業の中でこれらを読み込んで基礎体力作りをすることが必要だ…。

→「本当の意味での学び」の手立て、方法を深めるのが教科教育法なのですね。「表面上の知識」から「深く知る」へ向かうと、もっと「知っていきたい」という意欲や探究心、改革願望などにつながるのでしょう。「本当の意味での学び」とは学びの質にかかわっているのです。また、

「自分なりの観点をもって分析」するとは、二重の意味があって、教える側がそうした観点から題材や教材を選び、学ぶ側も与えられた資料などから自分の分析眼を育て鍛える、そうした両者の営為が教室空間での授業ということなのでしょう。

(早大 地歴科教育法 2 A 2016.12.10. 第 10 回資料)

なお、期末レポートのなかで、感想文について次のように記した受講生もいた。

◇(前略)授業時に書くコメントの存在も大きかった。もし、それがなければ、1時間半の授業をただ漫然と受け身で聞いて終わっていたのかと思うと恐ろしい。自分が授業の中で考えさせられたポイントや印象に残る資料は何かを探しながら聞くことで、より授業が有意義なものになった。人は日々を過ごす中で膨大な情報を見て、それに対して色んなことを考えているはずなのに、それを思い出す機会がないばかりにその大半を忘れ去ってしまうことに気付いた。とてももったいないと思う。感じたことを、直後に思い出し言葉で表現することの大切さを感じた。(早大 地歴科教育法 2 A 2017.1.28. 第 15 回資料)

◇他者とともに育つためのフィードバック

(前略)考えてもみると教える者と教わる者の関係性の基本というのがこのフィードバックにあると思う。教師があるたたき台、もしくは見本を作りそれを参考にして、生徒が自ら考えつくり出し教師に評価してもらおう。良ければ褒められるし悪ければ助言と叱咤激励をする。教わる者は自分の世界に閉じこもるだけでは成長が困難だと思う。必ず他者の視点が入って初めて自分を客観的に見つめることができる。さてフィードバックを受けるのは生徒だけか、いやそれは違う。教師もまた生徒の考えを通じて気づき学ぶことが多いのである。社会という科目は数学や理科とは異なり本来答えのない問題を取り扱っているはずだ。受験で問われるのはもちろんその問題に立ち向かうための知識と熱意であろうが、答えは自分の中で見つけるもののような気がする。授業のフィードバックというのは社会に対する切り口を生徒に教えてもらうまたとないチャンスであり、またそれらを生徒に還元できるというのは何とも建設的で、双方向的ではないか。(後略) (早大 地歴科教育法 2 A 2017.1.28. 第 15 回資料)

## おわりに

これらの感想やレポートにはフィードバックによる受講生と教員、受講生相互の学び合いの深化と共有の大切さが記されており、「教える者と教わる者の関係性の基本」だととらえた受講生もいる。この、教育における生徒と教員、生徒相互の関係性の構築のための有効な手立てのひとつがアクティブ・ラーニングではないだろうか。

本報告が、アクティブ・ラーニングの問題点を見つめながら、より充実した教育方法への「解決への手立て」、あるいは「問題の深化」につながれば幸いです。